

毎日常聞から今回のお話があり、去年まで私、かなり賛成していた関係で仕事の依頼を所る習慣がなく、ふたつ返事で引き受けたまではよいけれど、よく考えてみれば、これは大変なことにして、先年東大とてび出論争をやられ、連夜のテレビ番組で敵をたき倒す様子ばかりで、国民的に有名な西部さんのこと。一撃打って、とても勝ち目が無い。意見が衝突させるを得ないかたらどうしよう。と、恐るゝとすると「大家の真理」(NHKフック)の頁を繰ってみると意外にも、なるほど納得できるどころが多いではありませんか。しかし「凡庸」「低俗」なことを大家を取りとなす口吻の端々に、実は愛情が隠し味になっているものと（私は）感じられる。これなら正直ありとりになりそうだと、まず安堵したような具合です。

さて、西部さんを理解しようとしてみようという言葉を、まずみななもすべきであらう。これを大家と言えど、知識人の反対、「知識人が大家を指導する」といふような説が、わりに信じてきました。ところが西

文化

君の、有り難うござります。それは結構だがもう「有知者」には、小生の見解にたいして知識人からのコメントを下さうといひながらためめったにばりやしません。(笑)「我は敗北したけれどもさうだから別切ってしまった小生としては、久方ぶりの反駁に戸惑いを覚えているのが残念だ。」

まあ、このお便りの内容もまた、小生にたいする悪意ではなくて「一種の手紙」、そういう扱いをしてあげたいから、これは事実としても無理でも問題として取り扱います。せいぜいが一月以内に一度のテレビ放送と「連夜」のお便りを待たせさせて「敵をたたき倒す種目」は先般遠慮氏あたりが尊敬したいのであつたのだと、小生の意識がいまわられていて正反對のものはずす。それに小生が「国民的な存在」なんだというのは随分すがすがしい感じがしますが、あなたにたいしては「一撃打つ種目」では断然ありません。

君が小生のものを読んだならばあなたがこの話を愛してもいいと思いますが、あなたもハカリがかりではないでしょうか？

「これはわかりにくい、わかりにくいのは私ばかりに思ったら、長年親しく西田さんへの教えを受けた佐伯啓思さん（経済学者）も、同じような人間を大家と……考えているのか……もうひてひてきり僕に伝わっていない」《同意》と言っていて、少し安心しました。

結局、知識のあるだけではなくて、倫理的な観地に照らして問題のある存在が大家、ということらしい。戦後の日本は、快楽主義と平等主義の道をひた走った挙げ句、価値の相対主義に陥った。その海に溺れているのが、大家である。じゃ、大家でないのは誰かどうと「真性の知識人すなわち精神の貴族。うしろ価値を軽々に信ずるでもなく、すべては無価値だと二対二に陥るでもなく、絶対と相対の間にひと筋の「平衡」を見出す」とする勇氣ある態度を、そう呼ばう。わかったような気がします。

それで西田さんが標榜するのは、

「専門主義化した知識人」の

橋爪 大三郎様

類を断る習慣がなく、で、小生の『大の病理』を読んでみたら「意外にも、なるほど納得できた」ことが多くはありますが、と書いておられる。小生などは、カネのために他人に手紙を書く、というような事態になつたとしても、その中で人を公営するのには手は失したたか考へて書いています。また「意外にも納得できた」なんて面白くない。それは、相手のことを読めぬから、相手の筆を眺めし思ひつらつとつていふ意味かも知れません。それに、

橋爪 大三郎様

「専門主義化した知識人」の
精神の狭隘と傲慢こそ問題

にしべ・すすむ 評論家＝1939年、北海道生まれ。東大経済学部卒。東大教授を辞職、高橋 啓二 大衆社会批判を軸にした評論を続ける。マスメディアへの批判も厳しい。著書に「大衆への反逆」「ニヒリズムを超えて」などがある。



いふことはよくおぼえて下さうが、それをあからさまにいふのは是れかといふもので、いやあつかひの陳ましいく思つたので、由來をきつてと説明すべきです。あなただの文面がどうする『國民的に行き亡』だから陳ましい奴だ、といふことになつてしまつた。

なぜかといふ點をなとにこだわつてみたかといふと、小生が『大家』とよぶ人々の典型は『一羽門畫化して知識人』のことにはかならず、彼らにおける精神の萎靡とそれゆゑの傲慢で、こそ、小生の批判の對象にはか

なつたわけからです。失礼ながら、貴人の文章にも小生は批判を差し向けたことがなつた次第です。貴君は生身の大家親を「わかにいへて仰る。わかつてくれ」とは申しませんが、そこでわかつてわつたはたはれな、互いに平行線を辿るしかないのです。貴君が指摘してくれたように、「伝統的な」が「蓄積されているものを保つて」の「真の保守」たる小生は考へています。その保つた方法について、小生は富樫二語を大事にすべきたと考へてゐた。貴君はそのことに同意した上、「このあたは同じじゃない」といわれる。もちろんその通りです。人間の言語活動がルール、マナー、エチケットというふうに制度化されたもの、それが伝統なのだ小生は考へます。

ところが貴君は「伝統と言語」とが分立しないケースもありうる」とおみなし、そして「私は言語をたづねます」と断言される。この二者択一は大いなる誤謬です。伝統に支えられていないような言語は狂人の戯言にすぎません。貴君は「言語は必ずまづ言われていないことを言う」という（意味で）未来に向かっても開かれているといわれる。その点で、過去志向の伝統と言語の通いが過去と指摘された。しかし、過去の人々もまたその時点で未来を志向して言語活動を営んでいたのです。そうならば、未来に向かう「仕方」についての知識が伝統のうちには含まれているとみるべきです。

「誰ともお目にしたことのないような日本語を、次々とつみ出していく以外との社会を救

貴君が伝統を捨てて言語をとるという過激な二分法に陥つたたのは、伝統は社会にとらいつていて、伝統同士が互いに衝突するものだから」「言語は、日本語、英語というふうあるとは言へ、根本のところでは、人間本来のあり方即ち其共通の性能をもっている」とみなしたもののようです。

小生の考えは、ルール、マナー、エチケットの体系としての伝統もまた一人間本来のあり

になつたはずで、小生、伝統のミステリー「ダイナミックかつ下マティック」と形容したのです。

日本のトラディションが伝統といふよりも因襲に傾きがちであるといつては、小生もよく承知しております。しかし、古語に於いて、おのれの社会の伝統をも叩く」といふ書物のやり方は、自分の手で自分の体を叩くに等しく、近代の知識人特有の自決殺の病といふべきで、みなごとの病がお好きだということなら、たしかに「大家に対する西部さんの苛立ち」は「言つて怪しいものである」のがむしろです。

一柳 節一 尊

往復書簡——新世紀末を創る

往復書簡特集は
今回で終わります

西部 邁様

「大衆」に対して苛立つ前に
「知識人」がきちんと仕事を



はしづめ・だいざぶろう 東京工業大助教授
(社会学) = 1948年、神奈川県生まれ。東大
大学院博士課程修了。言語派社会学の確立を目指
す。著書に「言語ゲームと社会理論」「冒険と
しての社会科学」「はじめての構造主義」など。

題はその方法によつて、たゞの大学教授に引つらぬ鳴らしてゐない。ちがひが聞くにはありませう。

「元氣の出る社会」で行つて思つてゐる私は、西部さんとの「インシム」と密關が異なるわけですがそれはちがひなく言語を重視するが保守主義なと聞いて意を強へました。しかしからぬに、社会はさうでと言語を無視してきたのです。が、それはまちがひ。言語を中心に社会学を再組織しよう。というのが私の立場です。

ところで、西部さんの思想の成否は、大家に対して倫理的にふるまふ根拠をどこに正確にするかにかかつてゐるはずだ。そして、大衆(われわれの日々の安逸や、形にならぬ欲望のこと)と、このまゝ距離をとれるものとを、伝統を言語でしよう。けれども、このあたつたは同じじやない。伝統は社会に違つて、伝統同然が互に衝突を起してゐます。さういふ言語が、日本語、英語、フランス語、スペイン語、根本のことばは、人間本来の精神のあり方に即ち、民族の性能をもつてゐる。そして、そこにあるはずだ。

西郷さんには、日本の大衆社会の進め方には、が欧米よりはなはたしい、と診断しています。それは、こじやないでしょうか。日本の伝統は、言語が社会関係から目立ないで、十分にその性能を發揮してこなかった。たがその分だけ、快楽主義も平等主義も過剰するのだと。われわれ日本人は残念ながら、論理學も、數學も、哲學も、社會科學もつみませんでした。その必要を感じなかった。とすれば、うっかり日本社會の伝統に根ざした「精神の貴族」に欠かれないと西郷さんがもおっしゃる言語能力が、成熟しそこなう可能性もある。つまり、伝統と言語とが両立しないといふケースものゝごとく、とてつてのが大事です。

そこで私は、言語をとります。言語とはちつた伝道の一環で、そこにはあらゆる権力が凝集しています。が、それは必ず、また言われていないで消滅してしまふ。誰もまた耳にたてていない。誰もまた口に次々とつみ出しては、内外への社會を救う道はない、といふのが私の理解です。日本は特殊な社會文化と言ひ平氣のものではないな

いのですが、公平に見て、日本以外の先進社会と日本とは、社会の要求する言語の水準にまだ大きな開きがある、と思います。

伝統に依拠して、伝統を忘れた大衆を叩くという西部さん們的な行方方もわからないのではないのです。ただ、それより、言語に依拠して、おのれの社会の伝統をも叩くという戦費のほうが、日本で社会科学を实践する場合にはずっと重要である。この点で西部さん、翼を叩きたいのじゃ、おきまねはそれだけの仕事をしたんだ、と聞かれば、まだ胸を張るわけにはいきませんが、でもあえて言えば、大衆に対する西部さんの苛立とは、言うて餘りないもので、ひとつのことごとくです。言葉を妨げる人間（知識人がきくと仕事をせしなげ限り、問題が解決しついでしょ、というのが、私の感想であります）。

新年早々、お騒がせしましたではまた。

敬具

後記より

新年早々、お騒がせしました
ではまた。